

にゃんにこ王子



宮津怜佳

マウは旅人である。

特にあてはない。女一人、気の向くままに、あちこちを見聞して回っている。

であるから、とある街の宿屋の一階の食堂で、一人遅い昼食を取っていても、別に問題はない——筈だ。

さて。

そこでマウは、隣の客の噂話を耳にして、嫌な顔をした。

噂とは、

「第一王子レックス殿下がこの街に視察に来ているらしい」

というものである。

王子様なんぞが出張ってきているともなれば、当然そこには護衛が付いているだろう。それに引きずられて、街の警備も、不必要に神経質になりがちだ。

そんな中では、マウのような旅人は、何らやましいことがなくても、やたらと警戒されることが多くなる。

要するに——非常に居辛い。

迷惑な王子め、と、マウは思った。勝手な感想である。

『早めに移動した方がいいかな』

ふわふわした栗色の癖毛を掻き上げつつ、マウは席を立った。

と、そのときである。

だん、と乱暴に宿の扉が開かれた。

「我々は警備隊である！ 宿を検める。皆、その場で動くな！」

声と同時に、一斉に武装した男達が踏み込んでくる。

只でさえ人の少なかった宿の食堂は、しん、と静まりかえった。

剣や槍を手にした兵士が、何人も並び、その場にいた客達を威圧している。そして兵のうちの数人は、奥に入り階段を上がって行った。上階には、客室がある。

『随分乱暴な警備兵達ね』

マウは周りを見回して、眉を顰めた。

これまでに、宿検めに出くわしたことはあるが、このように派手に乗り込んできたのは初めてだった。

『やっぱり早く移動するんだったな』

まだ呑気にマウが溜息を吐いたところで、階段から兵士が降りてきた。

「この荷物の持ち主は誰だ？！」

食堂に向かって大声で叫ぶなり、手にしていた色褪せた革の鞆を、食堂中央の机に放り出した。

「……ちょっと！」

マウは思わず、張り合うように大声で返す。

放り出された鞆は、紛れもなく、マウのものだったのだ。

「勝手に人の荷物を触らないでよ！ しかも乱暴に扱うなんて、どういう神経してるの?!」
だかだかと大股で中央に進み出るマウの前に、槍が二本、差し出された。足を止め、見回すと、兵士四人に取り囲まれている。

それでも、マウは負けずに、兵士達を睨みつけた。

「女。これは、お前の荷物か」

鞆を持ってきた男が問う。視線の向きを男の方に変えたマウは、更に眼差しを強くする。

「そうよ」

が、その態度は逆効果だったようだ。男は口をへの字に曲げると、鞆に手を掛けた。何をしようとしているか察したマウが、

「ちょっと！ 勝手に開けないでよ！」

と、男に詰め寄ろうと一歩踏み出すが、両脇の兵の槍により阻まれた。力で押しても、屈強な兵士二人に敵うはずもない。

マウが足止めされている間に、男は鞆を開き、中の小瓶を一つ、取り出した。

「やはり、怪しげなものを持っているな」

そう言われて、マウは完全に頭に来た。だから、小瓶の蓋を開けようとする男に、冷たく言い放った。

「それは毒。開けると死ぬわよ」

「なっ……！」

男が思わず小瓶を放り投げる。

瞬間。

「我が物、我が手に戻れ！」

右手を上を翳してマウが唱えると、きらきらと光が掌から伸びて、蜘蛛の糸のように光が小瓶を絡め取った。

そして小瓶は、マウの掌の上へと収まる。

「……冗談よ。これはただの胃薬」

涼しい顔をして言っただけのマウを、兵士は顔を紅くして睨んだ。

しかしマウは、

『ふんだ』

と、しゃあしゃあと小瓶を服の中に仕舞い込む。

「貴様、やはり魔術師か」

「だから、何？」

マウは確かに魔術師だが、だからといって兵士に気後れする道理はない。
ない——筈だったが。

「連行しろ！」

中央の男が命じるなり、兵士達が一斉にマウを取り押さえた。

「えっ?!」

いきなり過ぎて、抵抗する暇もない。

「ちょっと待ちなさいよ、私が何したっていうのよ！」

こういう場合の常套句だな、と自分で思いつつも、マウは、そう叫ばずにはいられなかった。

が、やはり同じくこういう場合、その言葉は無視されるものである。

こうしてマウは、街外れの砦へと連れて行かれたのだった。

砦の取調室に座らされたマウは、不機嫌そうにふて腐れていた。

まあ、何の心当たりもないのに警備兵に連行されて、機嫌が良い人間はおるまい。

かろうじて、マウの唯一の荷物である革の鞆が、そのまま自分の側にあるのが救いだった。

実のところ、警備隊が鞆を返してくれた——のではなく、荷物を返せとマウが大騒ぎして煩かったので、大人しくしてやるからという条件で、取り返したのである。

鞆の中には魔術の道具も多く入っているので、失うと痛手が大きいから、マウは譲れなかったのだ。

但し、魔術を警戒してか、マウの横には槍を持った兵士が二人、べったりと張り付いている。

という、状況はともかく。

取調室ということは、誰かが取り調べにくるのだろう。

『隊長様でも出てくるのかしら』

むすっとしたまま、マウが考えていると、その人は直ぐにやってきた。

薄金色の髭が見事な、眼光鋭い紳士——髭のせいで威厳があるが、よく見ると、そこまで年配でもなさそうな男だった。

高級そうな服を着ていて、一目で高官だと分かる。

「魔術師か」

一言目は、これだった。

「……だったら、何？」

名乗るとか何かないのか、と思ったから、マウもぶっきらぼうに答えた。

「気の強い女だな。そのようだから、逮捕されるのではないのか？」

「大きなお世話よ！ っていうか、気の強さなんかで逮捕されちゃ堪らないわ！」

一歩も引かずに言い返すと、男は深く頷いた。

「それだけ大きな口が叩けるのだ、魔術の腕もそれなりにあろうな？」

マウは眉を寄せた。そういえば、ここへ連れてこられたのは「魔術師だから」である。つまり、この連中は「魔術師」を探していたのだ——と、悟る。

そのマウの前、二人を隔てる机の上に、男は一つの小箱を置いた。

「これを開けることができるか？」

箱を一瞥して、直ぐにマウが答える。

「出来ると思うわ」

「やってみよ」

命令されると逆らいたくなる性分のマウだったが、今回は、好奇心が勝った。そうまでして開けようとする箱とは、何なのだろうか、と。

箱を手に取り、指で辺をゆっくりとなぞる。と、底の一辺に、手応えを感じる。そこに指を触れたまま、マウは呪文を唱えた。

「我が手のもの、我が前に屈せよ」

ぱきん、と何か割れるような小さな音がした。

「開けていいのね？」

改めて確認すると、男は黙って頷いた。なので、マウは小箱の蓋に手を掛け、すんなりと開けた。

「……開いたか！」

これまでの落ち着いた声からは一変し、興奮を滲ませて男が言った。

が、マウの視線は箱の中に吸い込まれたまま、動かない。

「中身は何だ？」

問われて、マウは無言で、箱を机の上へと戻した。

覗き込むように箱の中を見た男は、

「空か」

と、さして残念そうでもなく、言った。

男の視線の先、箱の暗闇の中には、何もなかったのだ。

更に、

「らしい悪戯だな」

と男が呟いたので、マウは思わず男の顔を見る。今の言い回しは、何か、ひっかかった。

が、それを追求する前に、男が続けて口を開いた。

「よからう、お前は可能性がありそうだ」

それから、上着の左前を開いて見せる。裏地には、青地の犬の紋章が刺繍されていた。

「この紋章が意味することは分かるな？」

「……王宮勤めの方……ってことね？」

権力者になどおよそ縁のないマウでも、犬の紋章が王宮関係者のみに許されたものであること位は知っている。

「私はビション。第一王子レックス殿下下の視察団の長である」

「……………」

警備隊長どころではなかった。思いがけぬ大物の登場に、マウは——呆れた。

『なんで王子の視察団なんかが、善良な一魔術師に絡むのよ！』

善良かどうかはさておき、実際、不自然な状況である。

その言い訳をするつもりでもあるまいが、ビションは話を続けた。

「先日、我々視察団が滞在中のこの砦に、進入した賊がいた。地下牢まで追い詰めたが、残念ながら、捕らえることは出来なかった。というのも」

ビションが髭をひと撫でした。

「魔術によって妨げられたからだ。どうやら仲間に、魔術師がいたらしい」

「そんなの、私は知りませんが？」

自分とは程遠い身分の相手と知り、流石に言葉が少し丁寧になってしまう。が、『だからといってこんな乱暴が許されるものか！』という負けん気があるからか、余り敬語にはならなかった

。それでも、ビションは特に気にしていないようである。

「知っておっても、そうは言わぬだろう」

「知らなかったら、知らないとしか言えないじゃないですか」

「私は問答がしたい訳ではない。お前が賊とは関係ないというのならば」

ビションが再び髭をひと撫でした。

「その証を立てよ」

「だから、そんなの知りもしないのに、どうやって証を立てろとおっしゃるんです?!」

マウの苛立ちを含んだ問いに、ビションは静かに答えた。

「この小箱のように開ければよい」

「……は？」

「案内してやろう」

そう言うとビションは、マウを取り囲んでいる兵士達に、命じた。

「この者を、地下牢へ連れて行け」

「……ちょっと!! それって案内じゃなくて、投獄じゃないのよ!」

マウがそう指摘したところで、誰も聞いてくれはしなかった。

そしてマウが放り込まれたのは、地下の一番奥の牢であった。

それまで、例によって喚き騒いでいたマウだったが、その牢を見て、ぴたりと静かになった。恐れたのではない。

その牢が奇妙だったから——牢の中に、がっつりと壁がそびえ、しかもご丁寧に扉まで付いていたからである。

「……何、これ？」

牢の中に部屋があるなど、聞いたこともない。

「それが、魔術師の仕業だ」

柵の外から、ビションが言った。

「逃亡した侵入者をかばって、その壁が現れた」

「……と、いうことは……？」

「侵入者は、その中だ」

マウは首を傾げた。牢の中に入れ物を作ったところで、何の助けになるのだろうか。

「そうして時間を稼ぎ、我々に見えぬところで、どうにかして逃亡を図ろうとしているのではないか、との結論に達した」

マウの抱いた疑問は、ビションも想定済みだったようで、直ぐにそう話した。

「つまり、余り時間はかけられぬ。もしお前が、この扉を開いて、侵入者を捕らえるのに協力すれば、お前は侵入者とは関係がなかったと認め、釈放し、また協力した褒美として金一封を与えよう」

『金』という言葉に、マウがぴくりと反応する。が、話はそこで終わりではなかった。

「だが、開けられぬとなれば、侵入者の協力者として、一生をそこで無為に過ごすがい」

「そ……それ、選択の余地がないじゃない！」

柵に取りついて、もっともな突っ込みを入れるが、ビションも兵士も、既にマウに背を向けている。

しかも、

「もし扉が開けるときには、必ず私を呼ぶように。でなければ、協力したと認められぬぞ」

と、首だけ振り返って付け加え、そのまま去っていった。

「……これだから権力者なんて！！」

腹立ち紛れに、マウは、思いっきり柵を蹴飛ばした——ら、足が痛かった。

「ああ、もう！」

振り返り、柵にもたれかかると、広い壁と扉が、目に入る。

マウは改めて、壁を見渡してみる。

「……確かに、トীগ派魔術のシロモノね……」

これを開けなければ、人生の終わりだと宣告されたのである。

納得できる展開では全くなかったが、抵抗するためにも、やはりこの扉を開けてやるしかない。マウはそう思った。

「あーあ、ほんと、第一王子のお陰で良い迷惑だわ！　なんで私がいるときに、こんな所に来て、賊に侵入されたりするのよ！！」

怒りの矛先も見付けた。まるっきり八つ当たりだが、当人がいる訳でもないから言いたい放題である。

苦情を言い捨ててすっきりしたのか、マウは、息を吐いて、手に持っていた鞆を——連れてこられるときに、側にあった自分の鞆をしっかりと掴んでいたのである——床に置いた。

「……ま、要するに、開ければいいのよ、開ければ」

こうなったら、褒美をふんだくって大きな顔で出て行ってやらなければ気が済まない。

そうと決めたら、マウは早速、作業に取りかかった。

まずは、かけられた魔術の全容を理解しなければ、解体することはできない。扉へ近付き、そと扉に手で触れて、目を閉じ神経を集中する。

集中——していくところで。

「おい、お前。何をしている」

後ろから声がした。

多分、自分に向けられた声だと思ったが、作業の邪魔だったので、マウは無視することにする。

意識を深く、扉へと向ける——ことが出来そうだったところで。

「おい、そこのふにゃふにゃ頭のへろへろ服の女！」

再び、後ろからの声。

「誰が『ふにゃふにゃ頭のへろへろ服』よ！」

集中は途切れた。

マウは振り返り、言い返す——が、そこには誰もいない。

「……あれ？」

「どこを見ている」

声は下方からした。釣られて視線を落とすと、柵の根本に、一匹の猫がちょこんと座っていた。

艶やかな毛並みの黒猫で、青玉色の瞳がマウを真っ直ぐに捕らえている。

「……猫……？」

まさかね、と失笑しかけたとき、

「反応が遅い！　呼ばれたら、直ぐに返事をしないか」

黒猫がしゃべった。

「……………え」

三度瞬きして、ついでに目を擦って見るが、黒猫はやっぱりすまして、そこにいた。

「すごーい、しゃべれる猫がいるなんて！　とびきり優秀なカト派魔術師の使い魔なんかには、たまにいるって聞いたことあるけど！！」

興奮した様子で床に座り、視線を落として黒猫と向かい合う。

「あなた、誰か凄い魔術師の使い魔なの？」

マウが尋ねると、黒猫はぷいっとそっぽ向いて答えた。

「私は使い魔などではないぞ。れっきとした魔術師だ」

「……魔術師？」

「いや、まあ、今は事情があって、魔術は使えんが」

魔術が使えなければその時点でもう魔術師じゃないじゃない、と思いつつも、何だかそれは言い訳する子供のようで、マウにはとても可愛く思えた。

だからもう、我慢しきれず。

手を伸ばして黒猫を抱き上げた。

「?! こら、何をするか！」

「だって可愛いんですもの」

元来、マウはかなりの猫好きなのだ。

初めは足をばたつかせて抵抗を見せた黒猫だったが、胸にしっかりと抱き、指で喉元を撫でてやると、大人しくなった。

暫し、至福の時間を過ごしたが、別れは直ぐにやってきた。

かつかつと靴音がしたかと思うと、見回りの兵士が牢の前に立ち、中の黒猫に気付いて怒鳴った。

「プーラ！ 牢の中に入るんじゃない！」

大声に、黒猫よりもマウの方が驚いた。腕が弛み、その瞬間、黒猫はすっと床に降り立ち、柵の隙間から外へと駆けて行ってしまった。

「あ～……」

名残惜しそうに黒猫が去った方向を見やるマウをそのままに、見回りの兵士も戻っていく。

一人になったマウは、すっかり気が削がれて、扉の調査を諦めた。

立ち上がると、簡易寝台になっているところへ座り、そのまま昼寝——あるいは、ふて寝——をすることにしたのだった。

夕刻、牢には食事が運ばれてきた。パンとスープ、主菜、副菜まで揃った、意外と豪華な食事だった。

気をよくしたマウは、鞆から木片を取り出した。床に置き、

「我が身を支え、我が物を支えよ」

と唱えると、木片は独りで立ち、小振りな机と椅子に変化する。現れた机に布を掛ければ、立派な食卓となった。

それから、小さな水晶球を出し、中央に据える。

「我を照らし、我が視界を照らせ」

水晶球は内からほんのりと輝き始め、ふわりと浮いた。

柔らかい光に照らされた机に食事を並べると、ちょっとした晩餐会の出来上がりだ。

マウは、ちゃんと椅子に腰掛け、

「では、いただきます」

上機嫌で料理を口に運んだ。味も悪くなかった。

「んー、意外な好待遇ね」

ここが牢だということを完全に忘れて、マウが食事を楽しんでいると、

「何をやっているんだ、お前は……」

小馬鹿にしたような声がした。

声の主は直ぐに分かった。昼間の黒猫だ。

「こんばんは、猫さん」

黒猫は、柵の隙間からするりと中へ入り、マウの足下に座った。

「猫さんも少し食べる？」

「おいお前、口の利き方に気を付けろ。私は王族だぞ」

「……………」

猫の社会にも王だの何だのという階層があるのか、と思ったら、それはもう微妙な気分になった。が、昼間この猫が自分を「魔術師だ」と言っていたことを思い出し、全部自称だしね、と思い直す。

そして、気を取りなして。

「プーラ、貴方も少し食べる？ 魚があるわよ？」

とりあえず、昼間兵士が呼んでいた名前で、改めて話しかけてみる。

名を呼ばれたことで納得した——というより、興味に移ったのであろうが、黒猫はとんと身軽に机に上がると、料理を見渡した。

「魚より、そのチーズがいい」

「チーズ？ いいわよ」

マウは皿を整理して、小皿にチーズだけを乗せて、黒猫の前に差し出した。すると、早速黒猫は、チーズにかじりつく。

その様子をマウは暫し楽しげに見ていたが、やがて自分も食事を再開した。

「それにしても」

チーズの塊の半分程を食べた黒猫が、話をし始めた。

「お前はこんな牢の中で、一体何をしているんだ？」

「何って……食事じゃないの」

「それは分かっている。……いや、そもそも食事をするのに、わざわざ魔術を使ってこんな演出までする必要があるのか？」

「演出は大事よ。折角なんだから、食事は美味しく食べなきゃ」

「うむ……まあ、それは一理あるか」

黒猫はあっさりと言った。

「食事の話ではなくてだな、お前は何故この牢にいるんだと聞いたのだ」

「ああ、そういうこと。……それなら、あのビジョンとか言う人に聞いてよ」

「ビジョン？」

「そう、なんか偉い人らしいわね。多分だけど、全部あの人の指示で動いてるみたいだったし」
大雑把な印象である。

「どうも魔術師をとっ捕まえたかったみたいね。『侵入者の逃亡を助けた魔術師』の容疑だって言われてるけど、別に私を本気でその容疑者だと思ってる感じじゃないし」

説明をしている内に、マウ自身の頭の整理もついてきた。

「もしかしたら、誰でも良かったのかなって気がする。……そうよ、私は運が悪かっただけで」

そもそも兵士に目を付けられたのは、怪しげな荷物を持っていたからと、兵士にたてついたからだ——ということには、思考は向けぬことにしたらしい。

代わりに、

「あ、それと、小箱を簡単に開けちゃったのも、まずかったのかな」

と考察した。

「小箱？」

「そう。トوغ派魔術の代表格、鍵の魔術が掛かってた、小箱。術式が簡易な作りだったから、要を壊してやるだけで、すんなり開けられたわ」

ここで、昼間の小箱のことを思い出した。

「中には、何かこう……ぼんやりとした意識みたいなのが入っていて、開けると直ぐに消えちゃったんだけど」

それに気付けたのは、開いた本人であり魔術師であるマウだけであろう。だから、横にいた兵士も、後から箱を見たビジョンも、箱の中は空にしか見えていない。

そうだとすると。

「わざわざ開けさせた小箱の中が空でも、全く不思議に思ってた……って、ちょっと引っ

かかるんだけど」

とにかく、ビジョンの関心は箱そのものにはなかった、ということは確かだろう。

「……そもそも、あのビジョンって人は、魔術にあまり興味がないのね」

「何故、そう思う？」

「うん。小箱を開けられる魔術師を探してる癖に、トوغ派かカト派かを尋ねてこなかったから。そもそも、魔術師に二派あることを意識してないってことよね、それって」

「……だろうな。王宮では、トوغ派が正統で、カト派は亜流という認識だからな。魔術といえばトوغ派のみだと思っているのだろう」

「亜流、ねえ…」

実際、主に永続的効果を持つ魔術であるトوغ派の方が、即効性の効果を持つ魔術が中心のカト派よりも、人々の目に触れる機会が多いのである。

「まあともかく、小箱を開けられれば、その扉も開けられるだろうっていう流れだったから。本題は、こっちの扉だったってことね」

横を向いて、固く閉ざされた扉の方を見た。

「まだちゃんと見られてないけど……小箱とこの扉は、同じ魔術師による魔術なのかしらね？
だったら納得できる流れではあるけど」

最後の一口を食べ終えて、マウは正面に向き直る。

「あの小箱は犯人の遺留品だってことで……それも変な話よね？」

黒猫に疑問符を投げかけると、こちらも綺麗に食べ終えて、毛繕いを始めていた。

「ねえ、聞ってる？」

答えない黒猫に、マウが更に問いかけたが、黒猫はそれでも知らん顔で、自らの作業に集中している。

「……まあ、別に良いけど」

ふう、と息を一つ吐き出して、マウは食器を片付け始めた。

「……で」

やっと毛繕いに納得したのか、黒猫は机から飛び降り、床に座り直した。そして、マウに問う。

「お前はこの扉を開けられるのか？」

「まあ、大丈夫でしょ」

水晶球を手にとりながら、軽い調子でマウが答えた。

明かりが消え、辺りが暗くなる。

暗がりの中、マウは水晶球に替えて鞆からもう一枚の布を出す。それを机にかぶせ、

「我が身を支え、我を安んじよ」

と唱えると、机はするすると形を変え、寝台へと変わった。

マウはそこに腰を下ろした。

黒猫が、くつろぐマウを真っ直ぐに見つめる。

「お前は、カト派の魔術師だろう？」

「……ええ、そうよ」

先程から盛大に使っているマウの魔術は、物品の形を一時的に変化させて利用する、カト派の魔術の一種なのである。

それをそうと理解できるということは、この黒猫は、ちゃんと魔術を理解しているということの意味している。自分を「魔術師」だと主張できるのは、そうした知識があればこそかもしれない。そう思ったマウは、

『使い魔がそれだけ出来るってことは、主人の魔術師はかなりの使い手なのかも。どんな人かしら』

などと、思いを馳せた。

が、黒猫は、更に追及する。

「カト派の魔術師が、トوغ派の魔術の術式を理解できるのか？」

「……トوغ派だのカト派だの言ったって、どちらも起源は古代アニアサード魔術。体系化される課程で分裂したってだけで、根本原則は同じ、でしょ」

「理由にならん。原則を語って同一視できる程、両者は近くはない。だからこそ、二派としてあるのだから」

黒猫の論は正しい。だから、マウもこれ以上、誤魔化すことは出来ないと観念した。

「まあ、いいわ。貴方にだけ、教えてあげる」

ふう、と一つ溜息を吐いてから、マウは黒猫に手を伸ばし、抱え上げた。

「ここだけの話……私、最初はトوغ派に入門したの」

そして、黒猫を自分の隣に座らせる。その手はそのまま黒猫の頸元にやり、撫でると、黒猫は気持ちよさそうに目を細めた。

「ところが、そこの先生が、もうねちっこい性格のおっさんでね。教え方は鈍くさいし、失敗したらいつまでもしつこく責めるし、人の体はやたらと触るし……」

「なんだその最低な奴は」

「でしょう？ で、二年我慢したんだけど、耐えられなくなって、飛び出しちゃったの」

そこでマウは、ごろんと横になった。

すると黒猫が、マウの顔を見下ろすように座り直したので、マウは黒猫の姿を見上げつつ、黒猫の背中をゆっくりと撫でながら、話を続けた。

「他の先生……って言っても、同じトوغ派だと、何かのときに顔を合わせることもあるかもしれないでしょ。だからいっそのこと、って思って、カト派へ入門したの」

「その先生はいい人で、それに私もカト派の方が向いてみたい。そのまま、まあなんとか一人前になれたって感じ？」

「……つまり、お前はカト派でありながら、二年分のトوغ派の知識もあるということか」

「ん、まあ、そんなとこね。大抵の術式なら、扱うまでは無理でも、読み取る位はできるわ」

「なるほど、理解した」

黒猫が、尻尾をぱん、と一度大きく振った。

「が、そんな理由だとはな」

「そんな重大な秘密じゃなくて、がっかりした？ でも、しょうがないじゃない。我慢できないことってのは、どうしようもないんだし。それに、これもまた縁だったってことよ」

横になると、何だか眠気がやってきた。少しうとうとし出すと、黒猫を撫でるマウの手が、次第に重くなる。

黒猫は、マウの掌からするりと抜け出すと、マウの顔の近くへ寄り、伏せた。

「おいこら、トوغ派がそんな奴ばかりのように思うなよ」

「分かってるわよ」

マウがくすっと笑った。

「プーラ、貴方って、まるでトوغ派の魔術師みたいね」

「……………」

黒猫は何も言わず、マウの横で目を閉じた。釣られてマウの瞼も閉じられ、そのまま眠りに落ちてゆく。

マウが寢息を立て始めた頃、黒猫はゆっくりと体を起こした。

「……変な奴」

眠っているマウの頬をちょっと鼻先で突くと、黒猫は寢床から飛び降り、牢を出て行った。

翌朝、マウが目を覚ますと、黒猫の姿はなかった。

『ま、またあとで来るかも』

と思い、寝台を片付けて身を整えていると、朝食がやってきた。

朝食もまあまあ味の味であったが、流石にこの牢でそう長居する気はないので、さっと食事を済ませると、マウは作業に取りかかった。

扉に手を触れて、神経を集中させる。

程なくして、マウはこの魔術の術式を読み取ることができた。

「……う～ん」

扉から手を離すと、マウは少し考え込んでしまう。

そこへ、後ろから声がした。

「開けそうか？」

振り返らなくても、声の主は黒猫だと分かっている。

「一つだけ問題があるけど」

「問題？」

黒猫がマウの横に並んで立った。

「……この魔術、内側からかけられてて、術式の要も内側にあるの」

「つまり、外からは手が出せないと？」

「普通にやったら、そうね」

「何か勝算があるのか？」

「……ねえ、プーラ」

マウは、横目で黒猫を見る。

「手伝ってくれたら、市場でとびきり新鮮な魚を買ってあげる。どう？」

「魚よりチーズを寄こせ」

「了解。交渉成立」

にっこりと笑ってみせるマウを、黒猫は見上げた。

「何をすればよい？」

問われたマウが、小さな楔を黒猫に渡し、簡単に説明をする。黒猫は直ぐに承知して、楔を加えて、牢の外へと駆けていった。

マウも自分の準備を整えると、見回りでうろうろしていた兵士を引き留め、

「扉を開くからって、ビション卿に伝えてくれる？」

と親分を呼びつける。

ビションはすぐにやってきた。

「扉が開くというのは、まことか？」

「ええ。これから開くわ」

マウが自信たっぷりにそう答えると、ビションは頷いた。それから兵士を下がらせ、待機するよう命じると、自ら牢の中へと入ってきた。

『……何を考えてるの？』

扉の中には、侵入者がいる筈なのである。そしてマウだって、別段ビジョンに好意を持っている訳でもなければ、従う義理もない。

それでも一人対峙しようというのは――

余程、自信があるのか。それとも魔術師を舐めているのか。

恐らく後者だな、と思いつつ、それでもやっぱり、マウはビジョンではなく扉へと向き合った。

『プーラにお願いしたのに、無駄にしたくないし』

マウにとっては、偉そうな言動が得体の知れない高官よりも、偉そうな言動が可愛くてならない黒猫の方が、よほど考慮すべき存在だった。

扉の前に真っ直ぐ立って、目を閉じ、神経を研ぎ澄ます。

意識の隅に、黒猫の姿が見えてくる。

『ありがと。ちゃんと手伝ってくれて』

そこは、マウがいる場所と、扉の術式の要を結んだ延長線上。砦の側、地上のある一点。黒猫は、マウの指定した場所に、マウが渡した楔を打ち込んでくれていたのだった。

『これで、大丈夫』

黒猫が楔から離れたのを感じ取って、マウは更に集中を高める。

「……我が妨げを砕き、我が道を開け！」

地上の楔とマウが足下に配置した楔とを結ぶ線上に、魔力が満ちる。その線の中心点で、マウは、確かな手応えを感じた。

『よし！』

成功を確信して、マウが目を開ける。

目の前の扉は、変わらず閉じたままであったが――扉のある壁ごと、みるみる黒く変色してゆく。

『……なるほど、扉はただの象徴で、これは……閉じこめるための箱、だったのね』

そう考察した通り、扉のあった壁は、既に真っ黒な平面へと変化し、四方の角から、まるで砂のように、ぼろぼろと崩壊し、消えてゆく。

「おお……！」

ここに至って、マウの後ろのビジョンも、術の破壊の成功に気付き、喜びの声を上げた。

それが聞こえてはいたが、マウは振り返ることもなく、崩れる壁だったモノを眺め続ける。そこに現れるものを、見極めるためだ。

ビジョンの言によれば、ここに侵入した犯罪者の筈――だが、彼の言葉には嘘があると、マウは確信している。本当は、何がここにあるのか、好奇心が湧いたのだ。

だがそれは同時に、背後から注意を逸らすということであった。ビジョンがゆっくりと彼女に近付き、その手にナイフを抜いたことに、マウは全く気が付かなかった。彼女の背から心臓を狙

って、ナイフが構えられる。

と、そのとき、黒い影がビシヨンの手に飛びかかった。ナイフを握る手に痛みを覚えたビシヨンが溜まらず悲鳴を上げたので、マウも驚いて振り返り——初めて背後の状況を知った。

ナイフを持ったビシヨンと、その腕に爪を立ててぶら下がる、黒猫。

「……プーラ?!」

「っ、このっ！」

ビシヨンは大きく腕を振って、黒猫を振り払う。勢いよく放り投げられた黒猫は、空中で身をよじったが、間に合わず、壁に叩き付けられた。そのまま床に落ちる。

「プーラ!!!」

マウは横たわる黒猫に駆け寄った。

ひっかき傷を気にしつつも、ナイフを構え直すビシヨンを、マウはきっと睨みつける。

「我が友を守り、我が敵を捕らえよ！」

マウが唱えるとともに、部屋の隅に畳まれていた布——昨日、寝台を作ったときに用いた布が、しゅるしゅると伸び、ビシヨンの目の前を掠める。それに一瞬怯んだビシヨンの周りを一周し、布はあっという間にビシヨンを絡め取った。

「ぐあっ?!」

そのまま、ビシヨンは体勢を崩し、床に倒れる。

が、その様子には見向きもせず、マウは黒猫をそっと床から抱き上げた。

「プーラ……大丈夫？」

黒猫は、マウの腕の中でぐったりとしていたが、ほんの少しだけ、首を上げた。

「『我が友』か……私を、友と呼ぶか」

そして、薄く開いた瞳で、マウを見る。

「悪く、ない」

それだけ言うと、黒猫は、目を閉じた。首も力なく落ちる。

「プーラ……！」

マウが呼びかける声にも答えない——が、その体から、ほわりと何かが霧散した。

「……………！」

一瞬であったので、定かではないが、明らかに何かの気配だった。しかもマウは、ごく最近、これと全く同じ気配を感じ取ったことがあった。

これは、そう——昨日、ビシヨンに言われて小箱を開けた時、中に入っていたものと同じ気配——。

と、マウが思考を巡らせるよりも早く。

「いい格好だな、ビシヨン」

マウの背後で声がした。男の声だ。

黒猫を腕に抱いたまま、マウが首だけ振り返る。

そこでは、壁は完全に崩壊し、名残の光だけが微かに残っていた。その中に、人影が一つ、立

っている。が、直ぐに光は消え、人影は、明らかな人物の姿と変化した。

左手を腰に当て、真っ直ぐに立っている若い男だった。上質な服を身に纏い、堂々とした姿勢で、ビジョンを見るその表情は、尊大で——それでいて、どこか悪戯っぽさを宿した瞳が、まるで少年のよう。

勿論、マウは初めて見る人物であるが。

「……プー、ラ……？」

何故か、直感した。昨日から会話していた、愛すべき黒猫を呼ぶ名を、口にする。

と、腕の中の黒猫が、俄に身動きした。マウが驚いて腕を緩めると、

「……ニャー」

一声鳴いて、黒猫は腕の中を飛び出した。あっという間に檻を擦り抜け、牢から走り去る。

ぽかんとそれを眺めているマウを余所に、現れた男が更に言った。

「魔術を甘く見るから、そんな目に遭うんだ」

相手は勿論、ビジョンである。

「お言葉ですが、そもそもそうさせるのは、平素の殿下の過ぎる悪戯のせいです」

床に転がっていたビジョンは、苦い顔で立ち上がった。するりと体の周りを落ちる布はいくつも分かれており、持つナイフで切って自由になったことが知れる。

「それに、利用するだけ利用して口封じ……など、やり過ぎだ。私が許さん」

最早、何もない空間となった牢内を、男がゆっくりと進む。

「……そうおっしゃるのでしたら、そうせざるを得ない状況をお作りにならなければよろしいのです」

渋々といった感じでナイフを納めたビジョンは、眉間に深く皺を刻んで、マウを一瞥した。

「では、これを、どう処理なさると？」

「『処理』？ 随分な言葉だな。これは、私の『友』なのだぞ」

放心状態のマウの前に、男が到着した。そして、彼女に手を差し伸べる。が、マウは、その手と男の顔を交互に見比べるだけで、動くことができない。

と、男が失笑した。

「何て顔してる。『ふにゃふにゃ頭のへろへろ服』に、へんてこ顔か」

その、聞き覚えのあるフレーズ。

「……本当に、プーラ……なの？」

うわごとのようにマウが考えを口にするのと、男は小馬鹿にしたように、胸を張った——自分を王族だと名乗った黒猫の、あの表情と同じに。

「それは猫の名だ。『私』は昨日から一度も、そう名乗った覚えはないが？」

言われてみれば確かに、黒猫から名前を聞いた訳ではなく、マウが勝手にそう推測したに過ぎない。

そして、ビジョンが『殿下』と呼ぶ人物であるということは——

「ま、ま、まさか……第一王子、レックス殿下?!」

男は黙ったまま答えない——のは、肯定も同然。

マウは、口をぱくぱくとさせて、呆然とするほかなかった。

その後。

マウは牢から出され、客室に通された。

目の前には、豪華な椅子に足を組んで座る、レックス第一王子。そしてその膝の上に居座っている黒猫——プーラ。

黒猫は、周りに興味なさげに、毛繕いをしている。最早、口をきく気配はない。

「……で。つまり……どうということなの？」

マウが説明を求めたのは、当然のことである。王子もそのつもりだったらしく、かいつまんで話し始めた。

視察団滞在中の砦に、賊が進入したというのは事実。だが、その賊はそのときに捕縛され、取り調べのためにとくに別の場所に送られていた。

問題は、その騒動の最中に、避難させられていた王子の方に起きた。

ビジョンは、抜け道を通っての避難を指示していたらしいが。

「第一王子ともあろう私が、たかが賊一人に逃げ出すなど、許されん。そうだろう？」

同意を求められたところで、マウは寧ろカー杯否定するのだが、答えを聞く前に、説明は続けられた。

「いっそ、私自身を囚にして、賊を捕らえるべきだと思ったのだが……術式を少々、しくじってな」

——要するに、この我が儘勝手な王子は、賊とは関係なく、人を捕らえる魔術を発動させてしまい、うっかり自分の術に閉じこめられるという失態を犯した訳だ。

「……………」

まあ、永続的効果を持つトوغ派魔術は、ある程度の術式を前もって準備して持ち歩くことも多く、そうなると、誤作動の可能性は皆無ではないが。

「……初心者じゃあるまいに……」

うっかり心の声を口にしたマウに、だが王子は、からからと笑った。

「別に、私のしくじりではないぞ。側仕えの侍女が、ネズミを見たとかで騒ぎ出したせいだからな」

言い訳してる、とマウは思ったが、指摘する前に話は進む。

「まあそんな訳で、私はああして閉じこめられてしまったが……万が一のときの為に、ビジョンに小箱を一つ、預けておいたのだ。私の意識の一部を納めた小箱を、な」

それが、マウが開けた小箱だろう。

トوغ派の魔術師が、自分の意識の一部を何かに分割して有事に備えるのは、そんなに珍しいことでもないのだが——

「その話……あの人にはしてませんよね？」

「勿論。しても理解できんから、無駄だしな。ただ、私に何かあったときには、魔術師に開けさせる、とだけ言ってある」

魔術を解しないビジョンにしてみれば、王子から渡された小箱はすなわち、王子の魔術であり

、それを破れた魔術師は、誤作動した魔術も破れると判断した訳だ。

そして首尾良く目的を果たした後は、『王子が魔術にしくじった』という馬鹿げた醜聞をもみ消す為に、破った魔術師であるマウを始末しようとした――

そこまで気付いて。

『……王宮勤めの間人ってのは……一般民を何だと思ってるの！』

ふつつつと怒りが湧いたが。

「……ちょっと待って。意識の欠片があったのなら、とっととあの人達に話をすればよかったんじゃない……？」

「いや……それが、長期間箱に眠らせていたものだから、記憶が曖昧になっていてな」

答えつつ、王子が膝の黒猫の頭を、指先で歩く撫でた。

「かろうじて意識を受け入れてくれたのが、この砦の飼い猫の、こいつだったんだが……それでも寝起きのような状態で、状況把握も何もできていなかったんだ」

「……………」

そんな状態であったにも関わらず、『王族』で『魔術師』だと言っていたのは、そこは揺るがない自身の属性だったからなのか――生まれつきの尊大さなのか。

マウは、少し頭痛を感じた。

「まあ、一時的に私の意識は、プーラに匿われていたようなものだな。……暫くそうしていれば、そのうち意識もはっきりとしてきて、ビジョンに何か伝えることも出来ただろうが」

王子は視線を、黒猫からマウに移した。

「その前に、お前が術式を破壊してくれたからな。まあ、ビジョンが口封じまでやろうとするとは驚いたが、結果的にプーラの中にいたお陰で、お前を守ることもできたし」

そして、ふと思い出したように付け加える。

「ああ、ビジョンには、私の意識がプーラにいたことは言うなよ。あれは忠誠心が強い男だから、意識の一部とはいえ『王子』を投げ飛ばしたと知ったら、自害しかけない」

「……言いませんよ。説明するのも面倒臭いし」

その忠誠心のお陰で、こっちは殺されそうだったんだけどね、と思いつつも、先に王子自身が言ったように、確かに結果的に助けてもらっても、いるのだ。

そうして、全ての謎が解けたところで。

『……はあ。全く、随分迷惑なことに巻き込まれたものだわ』

結論はそこに達した。思わず、溜息が零れる。

「そんな顔をするな。ともかく、お前のお陰で私はこの通り、助かったのだ。礼を言うぞ」

とりあえず、誠意は言葉よりも現物で欲しいと思うマウだったが、続く王子の言葉は――

「褒美に、お前を私専属の宮廷魔術師に取り立ててや……」

「お断りします」

皆まで言わせず、即答である。

「なんだと?!」

「宮仕えなんて、冗談じゃないわ。何で私が」

マウは、吐き捨てるように言う。

「あんな、人を人とも思わない連中と一緒に働くのも御免だし。大体、私はのんびり好きに旅して回ってるところなの。邪魔されるいわれはないわ」

にべもなく断られた王子は、眉を寄せた。

「本当に、我が儘で気ままで自分勝手な奴だな」

「どっちがよ！」

つい本音が出た。相手は一国の王子で、我が儘が許される立場であり、自分とは比べるべくもない上、怒らせれば、命を取られようともまかり通るのだが。

「とにかく。もう私は用済みでしょ。帰って良いわよね？」

金一封をもらって、などと考えていたことは、もう彼方へと消えたマウは、長居は無用とばかりに、荷物を手に取る。そして、踵を返したが――

「待て！」

にゃう、と猫の鳴き声がした。と、次の瞬間、マウは、後ろから抱き留められていた。

「ちょっ……と、何を……？！」

「私を『友』と呼んでくれたじゃないか」

マウの背で、声が囁く。

「私は、お前が気に入ったんだ。もう少し、一緒にいてくれないか……頼む」

思いがけない言葉に、マウは動けなくなる。

と、その目の前に、黒猫がてくてくと歩み来た。かりかりと耳の後ろを搔いてから、床にぺたりと伏せる。

その、艶やかな毛並みを見ていると――昨日からの、プーラとの会話が、自然と思い出された。

偉そうな物言いなのに、急に可愛いことを言ったりする。

確かにマウも、プーラのそういうところが、気に入ってはいたのだ。

そしてそれは、目の前の黒猫の性格ではなく、後ろの人物のもの――

「もう……少し、だけ……なら……」

自然と、マウの口から言葉が零れた。

「私といてくれるのか？」

「……少しだけ、だからね」

「そうか……！」

マウを抱きしめる腕に、一際力がこもる。

その、子供のような喜びように、

『やっぱり……可愛いところもある……かな？』

と、思ったりもしたのだが。

「……成程、たまに甘えたことを言ったら、お前は断れなくなるんだな」

「なっ……？！」

普段通りの、余裕ありげな尊大な物言い。

「ちょっと、前言撤回！」

「もう遅い。もう捕まえた」

腕を振り解こうと暴れるが、どこにそんな力があるのか、全く敵わない。

「最低！ 詐欺師！」

「なんとでも言え」

マウの雑言にも、寧ろ楽しげに返す王子に、業を煮やしたマウは――

「この……にゃんこ王子！！」

と、力一杯叫ぶことで。

「……なんだ、それは……」

王子を困惑させることに成功し、とりあえず一矢報いることが出来たのだった。

部屋の外では、苦虫を噛み潰したような顔で言い争いを聞いていたビジョンが、これからをおもんばかり、深い深い溜息を吐いている。が、マウの知ったことではなかった。

○○○○ 終 ○○○○

にゃんこ王子

<http://p.booklog.jp/book/24468>

著者：宮津怜佳

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/minaniwa/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24468>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24468>